2026年11月15日　召天者記念礼拝

説教題『神の息吹を受けて』エゼキエル書37章1～10節

主任牧師　加藤　誠

「主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来たれ。霊よ、これらの殺された者の上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」（エゼキエル書37章9節）

昔は人が死を迎える場面が家庭の中にありました。子どもたちも死を前にした命を見つめ、大人たちの会話を聞きながら、子どもなりに死を感じ考える機会がありました。しかし今は病気も死も家庭の中から遠ざけられ、子どもが人の命について、死について学ぶ場面が失われつつあります。とても残念なことです。教会という交わりをいただいた私たちは、このように一年に一度ですが、命を分かち合った家族、信仰の先輩の在りし日の姿を思い起こしながら、その一人ひとりから学ばせてもらった大切なことがらを静かに思い巡らし、また今日を生かされている自分たちに神から語りかけられているメッセージに心を向けていく貴重な機会を大切にしたいと思うのです。

「メメント・モリ」という言葉を御存知でしょうか。ラテン語で「死を覚えよ」という言葉です。中世の修道院で修道士たちが「おはよう」の挨拶の代わりに交わした言葉と聞いています。この言葉には「カルペ・ディエム」と言葉が続きます。「今日の花を摘め」と訳される言葉です。「メメント・モリ、カルペ・ディエム」＝「死を覚えて、今日の花を摘め」。今日命を与えられていることを当たり前と思うな。お前にも必ず死がやって来る。今日の命を大切に受け取り、今日の花を摘め。今日神から与えられた働きを心込めて仕えよ…という意味になるでしょうか。

今年の夏、二人の方が62歳という年齢で地上での命を閉じ、主の御許に召されていきました。お二人ともとてもアクティブな明るい方でしたけれども、がんという病と約10年から7年向かい合い、私から見るとほんとうに「戦うように、しっかり前を向き続けて」、神から与えられた命を最期まで歩み切ったお二人でした。わたしは年齢が近いこともあって、お二人のベッドの傍らに立つと、いつも深く自分自身が問われる思いになりました。もしかしたら自分がそうだったかもしれない。もしそうなら自分はどのように病と向き合い、命を生きるのだろうか。そして「メメント・モリ、カルペ・ディエム」という言葉が心に何度も響いてきて、わたしを揺さぶりました。

この分厚い聖書が最初から最後まで私たちに問うていることは「お前は何を土台にして生きるのか？」ということです。「お前が土台にしているものは、ほんとうに土台するに値するものか？」と。「人はそもそも土のチリにすぎない」。これが聖書の人間観です。創世記２章「主なる神は土のチリで人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」。またコヘレトの言葉３章「人間は動物に何らまさるところはない。すべてはチリからなった。すべてはチリに返る。」土のチリから形づくられ、最後は土のチリに帰っていく人間は、神の息吹を吹き入れられた時にはじめて生きる者とされる。逆に言えば、神の息吹を受けることなしに人間は生きることができない。これが聖書の人間観です。つまり「神の息吹という土台」

なしに私たちは人間として生きることができないということであり、その「土台」を忘れ「自分は神の息吹を受けなくても生きられる」と勘違いした時、人がどんなにもろく崩れ、滅びに沈んでいくか。その失敗例がたくさん紹介されているのが聖書です。たとえばダビデという有名な王がいますが、彼が羊飼いの少年で「神の息吹／神の助け」なしに自分は立ちえないことを知る若者だった時には、謙虚ですがすがしい生き方をしていたのに、王になって力と富を手にした後、次々に失敗を重ねて、人びとと家族に悲劇を生み出していく姿が聖書には記されています。彼は途中から土台を踏み間違えたのでした。聖書は決して聖人君主たちの物語ではありません。どんなに立派に見える者も道を踏み誤る、そういう人間の失敗の実例集です。その失敗に学びながら「あなた自身が何を土台にして生きるかを考えよ」と聖書は語りかけているのです。

同時にこの聖書は、数々の失敗を性懲りもなく繰り返す愚かな人間を、それでも諦めることなく、祈り続け、正しい道に、命の道に、招き続けている愛の神を証しています。神の愛がどれほど深く、広く、高く、分厚いものかの証しが、聖書の分厚さです。それゆえ、神の生きた語りかけ、いわば神の愛の息吹を聖書から聴き取り受け取って、今日を生きていきなさいと、聖書は今日も私たちを熱く招き続けているのです。

今朝のエゼキエル書 37 章には「枯れた骨の復活」という不思議な幻が描かれています。イスラエルの人々が、愚かにも傲慢な生き方ゆえに神の約束の地を失い、バビロニアという異国の地に捕虜となって移された時、預言者エゼキエルを通して神がイスラエルに語りかけ示されたのが、この 37 章の「枯れた骨の復活」という幻です。祖国をすべて失う大失敗をし、自信も誇りもすっかり砕かれ、深い失意の中に座り込んでいた人々に、この 37 章の幻は語りかけられたのでした。

ここに示されているのは「枯れた骨のように崩れ落ち、立ち上がる力も失ったあなたたちだけれど、四方から吹き来たる、わたしの霊の息吹を受ける時、あなたたちは新しい人として立ち上がる！」という神の力強い約束です。「もうこれで俺たちの人生は終わった」と諦めている人びとに神は語りかけます。「終わりではない。ここからお前たちの新しい歩みが始まるのだ。わたしの霊を受けて立ち上がり、生きよ」と。

実際、バビロニアの捕囚の地でこの神の愛の息吹を受けたイスラエルの人々は、困難の中にあって新しい歩みを始めていきます。彼らは、創世記の初めからを書物にまとめて、土のチリである自分たちを大きな失敗と挫折のなかから新し人に造りかえていく、神の愛の息吹の希望の物語をあらわしていったのでした。

そして、この「枯れた骨の復活」の希望は新約聖書のイエス・キリストにつながっていきます。地上での命の終わりがすべての終わりではない。愛の神の霊に生かされる世界が用意されている。この神の復活の希望を土台とするとき、私たちは目に見えるものだけに心奪われるのではなく、目に見えないもの、永遠に続くものをこそ大切に選び取り、この世界にあって愛の神の語りかけを大切に選び取る信仰を与えられていきます。目に見えるもの、力や富に心奪われて、神の息吹を土台することの大切さをついつい見失いがちな私たちに、今日、聖書が熱く語りかけている命の言葉を受けていきたいのです。